

手作り紙芝居の可能性 —キッズ紙芝居コンテストの取り組みを通して—

鬢 櫛 久美子

野 崎 真 琴

小 島 千恵子

1. はじめに

「紙芝居」との出会いは、ほとんどの人が誰かに演じてもらって観ることによって始まるのが一般的である。演じてみようという思いは、紙芝居を観た経験があってその後に出てくるものだろう。ましてや、手作り紙芝居の経験となると、ほとんどの人に経験がないばかりか、作ってみようなどと自発的に考えることは稀だと思われる。

教育紙芝居の出現は、昭和7、8年頃である。街頭紙芝居が現在のような平絵¹⁾のスタイルになって、庶民の娯楽として広まったのが昭和5年であることを考えると、娯楽から教育への転換はかなり速かったといっていよいだろう。いち早く紙芝居を教育に活用した今井よねの福音紙芝居も、第2次世界大戦中の国策紙芝居も、街頭紙芝居の持つ感動力、宣伝力に注目した活用である。伝えたい内容を意図して紙芝居を作成し、それを演じて見せることで教育的な効果を狙ったものであった。つまり、紙芝居はメッセージを載せる媒体として活用されてきたのであり、紙芝居の教育的メディアとしての活用方法は、見せるということが中心であったといえる。(本研究において、メディアというときには、メッセージを載せる媒体という狭義の意味ではなく、人々の間にあって作用するものというほどの意味合いを持たせている。)

紙芝居を作るということに、紙芝居の教育メディアとしての意義は無いのだろうか。このような問いをたて、紙芝居の特性を生かした保育の場での活用方法を探ることを、本稿の課題とする。

紙芝居活用の現状、紙芝居についての言説、今日の社会における活用の意義などから、紙芝居を作るということに関する教育メディアとしての意義を考察する。そして、名古屋柳城短期大学子ど

も文化と紙芝居プロジェクト実行委員会(以下実行委員会と記す)の活動として行ってきた「キッズ紙芝居コンテスト」の取り組みを報告検討することで、手作り紙芝居の活用の可能性を探ってみたい。

2. 紙芝居を作るということ

紙芝居を作るということにはどのような意義があるのだろうか。この問いを検討するにあたって、まずは、2009年より実行委員会が実施してきた、保育現場、保育者養成校へのアンケート調査の結果²⁾から考察することにしよう。

(1) 保育現場、保育者養成校へのアンケート調査に基づいて

(1)-1 紙芝居を観る

最も一般的な紙芝居との出会いは、誰かに演じてもらってそれを観客として観るという方法である。保育現場へのアンケート調査の結果から、1週間に3、4回活用している園が最も多く、7割以上の園が1週間に1回は利用していることが明らかとなった。現在の保育現場でも、子どもたちは紙芝居を観ているといえる。また、保育者養成校の学生へのアンケートからも、紙芝居が演じられるのを観た経験は、6割から7割を超える学生にあり、そのほとんどが、幼児期の保育所や幼稚園での経験だということを知ることができた。

(1)-2 紙芝居を演じる

紙芝居を鑑賞するためには、演じ手が必要となるが、演じた経験を学生に尋ねたところ、本学では、1年生は41.2%、2年生は88.3%であった。どこで、経験したかを尋ねると、大学に入ってからの実習の機会がほとんどであった。子どもの頃に演じた経験は、ほとんどないことが分かった。

(1) - 3 紙芝居を作る

紙芝居を作った経験に関しては、ほとんどの学生がないと答えている。本学の1年生で、19.4%である。どこで経験したかの問いには、小学校以上の図画工作の時間などであった。手作り紙芝居を保育に導入しているところがほとんどないことが推察された。本学の2年生は30.1%が紙芝居を作った経験があると答えている。約10ポイントの増加だが、他の質問項目の答を合わせて考えると、これは学内での教育により経験した結果であると理解できた。紙芝居を作った経験があると答えた、他の保育者養成5大学の平均値は、19.3%であり、養成課程においても手作り紙芝居に関して教育がなされていないことが明らかとなった。

(1) - 4 調査結果より

以上の調査結果から、幼児期に多くの子どもたちが紙芝居と出会っていることが理解できた。しかしその方法は、一般的に予想される通り、観客として観るという経験によることがほとんどである。また、養成校においても保育の基礎技能や指導方法として、紙芝居を作るということに関する教育はほとんどなされていないことが明らかになった。

子どもが紙芝居と出会うには、紙芝居とそれを演じてくれる大人がいて成立する。しかし、ひとたび、紙芝居の魅力に引き込まれると、子どもは演じてみたくなったり、また作ってみたくなったりするものではないだろうか。保育の中に子どもが手作りする、子どもが演じる紙芝居が取り入れられるべきではないだろうか。またそのためにも、保育者養成校において、紙芝居教育が欠かせないといえる。

(2) 紙芝居を作るということに関する言説

昭和5年に平絵となった街頭紙芝居は、手書き1点のものであった。キリスト教伝道に紙芝居の有効性を見出した今井よねが、1933年「紙芝居刊行会」を設立し印刷紙芝居を出版するようになった。紙芝居は、手書きから印刷紙芝居となり、紙芝居が同時に複数作成され、手に入りやすくなったわけである。今井の制作した福音紙芝居は、早くから保育界にも取り入れられていた。日本保育学会創立(1949年)時には理事を務めるなど、保育界

を主導する立場であった副島ハマ(1905-1998)は、早くから、紙芝居を保育に活用した人物の一人である。副島は、「私が紙芝居を保育の中に取り入れたのは、昭和8年の春である」³⁾と記している。

私は其の頃漸く手に入れた「少年ダビデ」の紙芝居を演じて、日曜学校の生徒達に大変喜ばれた所から是非幼稚園にも紙芝居を取り入れたいと思つたが今の様に澤山の種類も無く、殊に教育紙芝居等のやうな幼児向のものが無かったので、同紙芝居の目的内容を日本的に教育的に變えて、幼稚園で演じたのが私の紙芝居保育の最初であった。³⁾

当時、日本聖公会鹿児島教区の司祭であった父を補佐してキリスト教の伝道活動を行いながら、鹿児島高等女学校で教鞭をとり、附属幼稚園の保育にもたずさわっていた副島は、毎週土曜日に人形芝居や紙芝居を保育計画に組み入れていた。当時の幼稚園にはまだ教材が乏しかったので、保育者が手作りする場合が多く、『少年ダビデ』も幼児向きに作り直したものだだったという。

上記の引用から、印刷紙芝居が、保育のなかに活用され始めた当時は、保育の教材・教具としての紙芝居がなかったことから、必要に迫られて保育者たちが手作りしていたことが推察される。

副島は、厚生省で18年にわたり保育行政に携わった後、『保育要領-幼児教育の手びき-』(文部省、1948年3月)の作成にも加わった。その一方で、保育者として紙芝居を保育の場に手作りして活用した経験から、紙芝居の感化力や教育的価値について考えを深め、印刷紙芝居の制作も手がけ出版している。『ありがとう』は本学にも残されている、副島の保育紙芝居である。

第2次世界大戦中、日本教育紙芝居協会³⁾の発行していた雑誌『紙芝居』の中に、手づくり紙芝居に関する記述がいくつかある。

倉橋惣三(1882-1955)は、日本保育学会(創立1949年)の初代会長であり、日本の幼児教育に多大な影響を与えた幼児教育学者である。彼は、児童文化に深い理解と関心を示し、紙芝居には立ち絵¹⁾の時代から関心を寄せていた。日本教育紙

芝居協会の理事となり、雑誌『紙芝居』の発行にも関与していた。

1942(昭和17)年5月号『紙芝居』に掲載された「ボクラノチカヒ」感想は、倉橋が、戦争に協力する国民教化のために行われた「軍事保護教育紙芝居懸賞募集」の入賞作品に感想を寄せたものである。倉橋が、具体的な戦争協力を行っていたという重要な事実でもある。しかし、この「ボクラノチカヒ」感想では、軍事保護教育紙芝居の趣旨に一切ふれていない。作品の製作過程における教育的意味を評価する感想を淡々と述べているのである。

「此の「ボクラノチカヒ」のいいところは、どこまでもくろうと臭くないところにあるが、(略)紙芝居の理論とか、紙芝居教育の為とかから、子どもを指導してかゝったのではなく、子どもの中に自然に流れてゐる過程の中から、子どもへの紙芝居を生れさせたのであつた。」⁵⁾

倉橋は、入賞作品の「ボクラノチカヒ」の中に、教師が子どもの思いを自然に表現させたことを評価している。そして、「子どもが作り、子どもが演出する」紙芝居を教育に自然に取り入れたことを高く評価したのである。

高橋五山(1888-1965)は、幼年雑誌の編集に携わり「絵ばなし」を発案し、昭和6年には、全甲社という出版社を興して、紙芝居児童文化として高め幼稚園紙芝居を出版し、保育の場に紙芝居を普及させた。現在でも、毎年すぐれた紙芝居に高橋の名前を冠した賞が与えられている。

1944(昭和19)年7月号『紙芝居』に折り紙芝居の作り方が掲載されている。記事のなかで、高橋は、「決戦下諸物資の窮屈な折柄です。生産者の供給に依存することなく、有合の材料での自給自足は最も望ましいことでもあります。」⁶⁾と、戦時下の物資のない時代にも、保育者が紙芝居を作り、子どもに見せることを奨励している。絵を描くのが下手だという保育者に対して、切り絵でも折り紙でもはって作ればよいのだということを論じている。実際、五山の作品「ぶたのいつつご」は折り紙を張って作成した著名な作品である。

松永健哉(1907-1996)は、東大セツルメントで児童問題に取り組み、社会教育に紙芝居を活用し、国策紙芝居につないだ人物である。松永健哉

は、倉橋惣三や、高橋五山についての説明で先述した、日本教育紙芝居協会を1938(昭和13)年に設立した中心人物である。松永が、紙芝居について論じた以下の文章は、大変興味深い。

「紙芝居の場合は、その演技に至るまでの諸過程及び実演そのものへ子どもたちを協力させ参加させ得るといふ点にあるのである。子どもたちが自分等で絵をかいたり。(ママ)実演の台詞を分担したり、又、蓄音器の準備にかかっていたりしている間に、単に紙芝居の内容を知ってえる者のみでなく、ほかにいろいろの訓練をえるといふ、そのことが、紙芝居のすぐれた点なのである。私自身はこれらの諸過程、及び実演後の整理をも含めて、その全体を一つの紙芝居と呼んでいる。」⁷⁾彼が教育メディアとして紙芝居を捉えたときには、子どもたちが作り演じる一連の過程すべてを含むものであると考えていることがうかがえる。

(3) 手作り紙芝居の現状と意義

文献からは、時代によっては、保育教材・教具としてとしての紙芝居が少なかったために、必要に迫られ保育者が手作りしたり、また作ることが奨励されていることが理解できた。現在の保育現場では、アンケート調査などから推察されるように、出版された既成の紙芝居を活用し、手作りした紙芝居を子どもに見せることはほとんどないようである。副島ハマの目的内容を教育的に変えて、目の前の子どもに合わせて作り直したという記述は、現在の紙芝居活用方法に反省を迫るものであると考える。今日、幼稚園や保育所では紙芝居がよく活用されているにもかかわらず、演じて見せる時間は昼食の前後やお帰りの時間などで、時間つなぎに子どもを楽しませていることも調査からわかっている。紙芝居の特性を生かし、教育メディアとして活用しようとするれば、目の前の子どもを理解し、ねらいを定め、既成のものでは十分でない場合が出てくるのではないかと考える。そのような時には、副島のように、子どもに合うもの、ねらいに合うものに作り直す、あるいは初めから手作りする事が望ましいと考える。

また、高橋五山の指導した折り紙、貼紙での紙芝居制作は、保育士研修会などで実際に実践してみたが、絵を描いて作成するよりも気軽に試みる

ことができるため、紙芝居を手作りすることを奨励する方法として有効であることが理解できた。また、実際に制作してみることは、紙芝居の構造特性を理解することにもつながり、保育の場で、子どもに作らせる方法を考える参考になることが、経験的に理解できた。

子どもが紙芝居を作ることに関しては、文献からは以下の2点を読み解くことができた。倉橋惣三は、子どもが自己表現として紙芝居を作ることに、手づくり紙芝居の有効活用を見出していることが理解された。松永健哉は、紙芝居を教育に有効活用する場合には、子どもが絵を描き、台詞を作り、それらを実演する一連の活動を紙芝居と考えていることが理解できた。

3. キッズ紙芝居コンテスト

子どもは、ひとたび紙芝居を作ってみると、作っただけでは満足せずに、自作のものを演じてみたくなったり、誰かに演じてもらいたくなるようだ。紙芝居を作り、演じることは、自己表出手段として有効な方法なのだ。

次に本研究では、紙芝居を保育教材・教具として活用するうえで、子どもが紙芝居を作るということに関しての可能性を探ることにする。方法としては、実行委員会が2007年から実施している手作りキッズ紙芝居コンテストの取り組みを報告し、それらの作品にみられる子どもの思い、そしてそれに寄り添う大人の関わりを中心に考察する。

(1) コンテスト実施の背景

実行委員会は2005年に立ち上げられ、子どもゆめ基金（独立行政法人国立青少年教育振興機構）の助成を受け、「紙芝居・ネット」⁸⁾の構築と公開、地域の保育者を対象としたフォーラムの開催などの活動をしてきた。手作りキッズ紙芝居コンテストもその一環として2007年に始め、助成金交付（2006年から2008年までの3年間）終了後も、本学の予算で実施している活動である。これらの実践的活動と並行して、紙芝居を保育との関わりから研究することも進めてきた。研究は、歴史的 연구に始まり、ここ数年は、保育現場や保育者養成課程における紙芝居の活用状況の調査を進めている。これらの研究の目的は、紙芝居の特性を明ら

かにし、保育における紙芝居の教材・教具としての意義を検討し、よりよい活用を目指すことにある。

2006年から3年間、地域の保育者を対象に開催したフォーラムは、1年目は「演じ方」（講師右手和子氏）、2年目は「作り方」（講師長野ヒデ子氏）、3年目は「紙芝居であそぶ」（講師やべみつりのり氏）というテーマで各講師を招聘し実施した。2年目のテーマに合わせて、2007年から、キッズ紙芝居コンテストを開始し、今年度で6年目となる。

(2) コンテストのねらい

全国には、歴史のある紙芝居コンテストもある。伝統文化としての紙芝居の普及をねらいとした、「箕面手づくり紙芝居コンクール」は今年で22回を重ねた。加太こうじらにより1980年に始められた、神奈川県「手づくり紙芝居コンクール」も全国に知られたコンクールである。また、単発的に実施されるものもある。公共機関が、テーマを定めて紙芝居を募集する類のもの、たとえば「交通安全」、「挨拶をしよう」などというテーマのもとに実施されるものがある。

保育者養成校が実施するコンテストの意義、特性はどこにあるのかと問われれば、教育メディアとしての紙芝居活用というねらいが背後にあると答える。教育メディアとしての紙芝居活用の目指すところの一つに、保育者養成にあっても、保育現場にあっても、コミュニケーション能力育成に有効なメディアであるという考えがあるからである。

手づくりキッズ紙芝居コンテストを実施することで、子どもの心の底にある思いの表現手段として、また、子どもならではの想像力の表出メディアとして紙芝居を活用し、子ども理解に役立てたいと考えている。また、コミュニケーションツールの発達した現代社会において、アナログな紙芝居が大人（保育者、保護者）と子どもの生の関わりを育成することに一役買えないだろうか考えたのである。

(3) コンテスト実施の方法

応募の対象は、全国の幼児から小学6年生までとした。画面数は4から10画面程度、テーマは自

由とした。実行委員会のメンバーが審査員となり、最優秀章 1 作品、優秀賞 2 作品、その他、努力賞、奨励賞を数作品選出している。

応募の方法は、ダイレクトメールで幼稚園保育所を中心に、チラシ (図 1 参照) と応募要項を送付するほか、「紙芝居 ネット」にも公開し募集している。



図 1. キッズ紙芝居近哲とのチラシ (2012年度)



図 2. 募集要項
場面ごとのナレーションを記入する用紙

手作り紙芝居作成にあたっては、大人と子どもの関わりをねらいとしているために、大人が子どものお話を書留めることができるよう、募集要項にナレーションを記載する用紙をつけている。

(図 2 参照)

最優秀作品、優秀作品は、本学の「紙芝居 ネット」上に、「手づくりキッズライブ」というコンテンツで、デジタル紙芝居として公開している。

(図 3 参照)



図 3. 「紙芝居 ネット」の「手づくりキッズライブ」

最優秀作品は印刷紙芝居として製本して受賞者に贈呈するとともに、関係機関に送っている。(図 4 参照) 表彰式を実施し、作者である子ども



図 4. 印刷紙芝居として製本された2010年度最優秀作品「たまごころころ」



図 5. 募2011年度表彰式で実演する受賞者

が演じる機会も設けている。(図5参照)

4. 手作り紙芝居の可能性

(1) コンテストの受賞作品からの考察

表彰式を実施し、そこに来られた家族と出会う、作品の背後に豊かな大人と子どもの関わりがあることに気づかされてきた。

例えば、2010年度最優秀作品「たまごころころ」(7歳男児)は、彼の幼稚園の担任の先生が、彼の幼稚園時の絵を大切にとっておかれて、小学生になった彼に、紙芝居コンテストに応募することを勧めることで応募された作品である。彼の表現力の素晴らしさと、それに目をとめた大人の関わりによって出来上がった作品である。この作品は、ユーモラスで、完成度の高い作品である。絵もアップ、引きの手法がうまく使われている。



図6. 「たまごころころ」表紙

「にわとりの母さんは『お使いに行ってくるからそこで待って(図6)と8参照した。』」

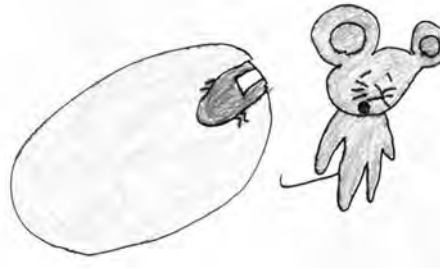


図8. 「たまごころころ」第7場面

「いそいでばんそうこうをはりました」
(たまごのひびに、バンドエイドを張った場面)

2011年最優秀作品「金魚のきんちゃん」(10歳女児)は、本学の学生が絵の得意な従妹に、応募を勧めたものである。実際に目の不自由な金魚を飼



図9. 「金魚のきんちゃん」表紙



図7. 「たまごころころ」第7場面

「ガーン」
(卵にひびが入ったことに驚くねずみの顔を画面いっぱいに描き表現している。)



図10. 「金魚のきんちゃん」第3場面

「そんなある日、おじさんが金ちゃんをトラックにのせてある場所へつれて行きました。」

育した経験から生まれた作品である。お話の完成度も高く、子どもならではの想像力、創造性の豊かさ、自由な発想が見て取れる。(図9-10参照)

他の作品からも、応募が実現するためには、子どもの絵、お話を目を留めた大人の存在があったということが分かった。作品から実証されるように、子どもの表現力や想像力は確かにすばらしいものである。紙芝居作品を仲立ちに、子どもは大人によって、存在そのものが認められたといってもよいだろう。

2011年度優秀作品「あれなんだろう」(5歳男児)(図11参照)は、4場面で構成されたとてもシンプルな作品である。電車の走る線路が1つの線で4画面全ての下部につながるように描かれていて、紙芝居の抜くという特性をよくとらえた作品である。「あれなんだろう」、「あっししゃだ」、「しゅっぽっぽ」、「いっちゃった」の4つの台詞だけで構成されている。演じてみると、とてもリズムがあり面白い作品である。ストーリーは、旅行先で電車を見かけた子どもが実際に発した言葉を母親が書き留め、絵は子どもの能力に合わせ、単純な形で描いた作品だということを、受賞決定後に聞くことができた。発達に遅れのある子どものあるがままに寄り添う母親の姿が、大人と子ども



図11. 「あれなんだろう」第1場面

もの関わりとして見られた作品である。

作品を通して、子どもの思いに気付かされることもある。たとえば、2010年優秀作品「なんで?」(5歳男児)(図12参照)は、次男である作者が弟の誕生を画面いっぱいの弟の顔と「なんで」と

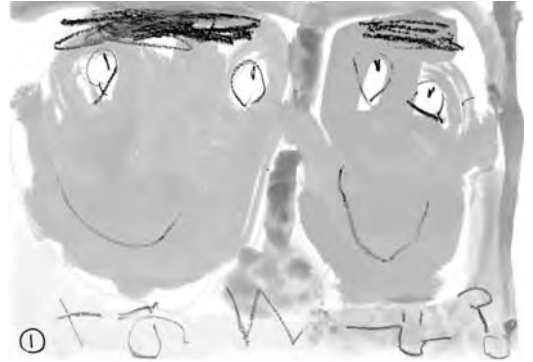


図12. 「なんで?」第1場面

「「なんで?」はくらの弟のけんちゃんです。」

いう言葉で、素直に表現した作品である。

各場面の台詞は、次のようである。1場面「なんで?」「はくらの弟のけんちゃんです」2場面「なんで、けんちゃんはこんなにかわいいんだろう」3場面「なんで、寝ててもかわいいんだろう」4場面「なんで、泣いててもかわいいんだろう」5場面「なんで、ご飯の後、口がきたなくてもかわいいんだろう」6場面「きっとみんなが、けんちゃんを愛しているからだね」

場面ごとに、繰り返される「なんで?」に、とても活発な子どもでもある作者に、嬉しさと、戸惑いが入り混じった思いがあることに、周囲の大人が気付かされた。演じるたびに、また観るたびに、大人は胸が熱くなるのを禁じ得ない作品である。

2010年度優秀作品「ずっと友達」(10歳女児)(図13参照)は、転校していく友達と合唱を通して繋がっていたいという思いが、力強い線で描かれたモノトーン作品である。もの静かな作者の思



図13. 「ずっと友達」表紙

いが、絵から見て取れた。

(2) 保育に導入された手作り紙芝居



図14. 「ざりがにのおさんぼ」表紙

「らいおんいけに ざりがにの おかあさんがすんでいました。」

(2)-1 受賞作品にみる意義

2008年度優秀作品「ざりがにのおさんぼ」(幼稚園年長組)(図14参照)は、クラスでザリガニを飼育したことから生まれた作品である。子どもたち25名が協力して描いた絵に、保育者が物語をつけるというクラス全員の共同作業による制作を試みたものである。環境、表現、人間関係、言葉などの領域を総合的に盛り込んだ保育指導法が、作品として結実している。

(2)-2 保育のなかで取り組んだ教員への聞き取り調査から

本学の附属園で保育の中に手づくり紙芝居を導入し、5年間コンテストに応募するという試みを実施してもらった。保育者がどのような成果があったと考えているか、聞き取りをした。その結果を以下①から④に簡単にまとめた。

①子どもの絵は、1枚に空間や時間が違うものが描かれて1枚でお話が完結する。子どもに紙芝居を作らせるためには、それをいくつかの場面に分けて描かせなければならない。方法を工夫することで、指導方法の開発につながった。

②子どもの思いを絵と、お話にするために、一人一人の子どもに向き合った結果、子どもとのコミュニケーションが図れ、信頼関係の構築に役立った。

③紙芝居という表現手段を子どもが主体的に活用

するようになった。例えば、行事などの経験を紙



図15. 紙芝居遊び
演じる子どもと観客の子ども



図16. 紙芝居鑑賞後、演じ手に拍手喝采

芝居に作って持ってくるようになった。

④紙芝居ごっこが、子どもの遊びに見られるようになった。コンテストへの取り組みを通して、保育者が演じ、子どもが観客という紙芝居の楽しみ方から、子どもが作り、子どもが演じるということが、園の中に伝承されてきている。(図15、16参照)

5. 終わりに

紙芝居を作るということに、紙芝居の教育メディアとしての意義は無いのだろうか。このような問いをたて、紙芝居の特性を生かした保育の場での活用方法を探ってみた。

過年度に実施した保育現場、保育者養成校へのアンケート調査の分析から、保育現場では保育者が演じて見せるという活用方法が主流で、子どもに演じさせたり、子どもに作らせることはほとん

どなされていないことが理解できた。また、保育者養成校でも、紙芝居を作るということに関して、基礎技能や保育方法を指導するカリキュラムがないことが明らかとなった。

次に印刷紙芝居が出版されて80年ほどになるが、紙芝居を作るということに関して、これまでのようなことが論じられてきたのか文献から探ってみた。

印刷紙芝居が福音紙芝居でしかなかった時代に、保育用に作り直して活用したという副島ハマの言葉から、以下のような示唆を受けた。紙芝居を目の前の子どもに合わせた教材・教具として活用するということが、意義があるといえる。現在の保育現場では、時間つなぎや保育への導入のために紙芝居を活用しているようだが、目の前の子どもを理解し、ねらいを明確にして紙芝居を活用することにより、紙芝居の教育メディアとしての可能性を広げることにつながると思える。

倉橋が、手づくり紙芝居には子どもの自己表出手段としての活用意義があると述べていたことも文献から理解した。また、紙芝居活用の教育的効果は、紙芝居を作り演じるという、その一連の行為のなかにあるという、教育紙芝居運動を推進してきた松永健哉の主張を見ることができた。

さらに、実行委員会のキッズ紙芝居コンテストの5年間の取組を通して、手作り紙芝居の可能性を探ってみた。紙芝居を作ることは、子どもには自己表出の手段となり、大人にとっては、子ども理解につながる手が解った。ことに幼児期の子どもは、そこに寄り添う大人が必要であり、子どもと大人の関わりを育むことができると結論づけることができた。また、作ることは、演じることへの興味をも引き出し、紙芝居との出会いを広げていることも見て取ることができた。子どもの発達段階に合わせた手作り紙芝居を保育の中に導入することで、5領域の総合的指導が可能となること、保育者の保育力の開発につながることで、子どもたちの遊びが紙芝居を作ることで紙芝居ごっこへと展開していることが理解できた。

今後は、手作り紙芝居を子どもに指導する方法の検討を、現場との共同作業により進めていきたい。その成果を、保育者養成校での、カリキュラムに反映させることができるような視点を、忘れ

てはならないと考えている。

注

- 1) 街頭紙芝居は、「平絵」になる前には、「立ち絵」、「鏡式立ち絵」のスタイルの時代もあった。詳しくは、鬢櫛久美子、種市淳子「保育におけるメディアとしての紙芝居—紙芝居通史を中心に—」『名古屋柳城短期大学研究紀要』No.27 2005 pp.53-68.
- 2) 鬢櫛久美子、野崎真琴「保育現場における紙芝居の活用状況」『名古屋柳城短期大学研究紀要』No.32 2010 PP.65-75.
鬢櫛久美子、野崎真琴「保育者養成課程における紙芝居—学生のアンケート調査を通して—」『名古屋柳城短期大学研究紀要』No.32 2010 pp.77-86.
鬢櫛久美子、野崎真琴「保育者養成課程における紙芝居その2—学生のアンケート調査を通して—」『名古屋柳城短期大学研究紀要』No.33 2011 pp.57-66.
- 3) 副島ハマ「幼児保育」『紙芝居』Vol.5 No.10 1942 p.45.
- 4) 日本教育紙芝居協会は、紙芝居を教育目的に活用しようとする動き、「教育紙芝居運動」を推進するために、1938(昭和13)年に松永健哉らにより設立され、戦前・戦中期に教育紙芝居の出版や普及を行った団体である。創設時のメンバーには、宗教学者の佐木秋夫(1906-1988)、劇作家の青江舜(1914-1991)らがいた。日本教育紙芝居協会は、『紙芝居』という雑誌の刊行を行っていた。
- 5) 倉橋惣三「『ボクラノチカヒ』感想：軍事保護教育紙芝居懸賞募集「佳作一席」」『紙芝居』Vol.5 No.5 1942 p.18-19.
- 6) 高橋五山「折り紙紙芝居の作り方」『紙芝居』Vol.7 No.5 1944 p.14.
- 7) 松永健哉「校外生活と児童文化問題」『教育』第4巻 第4号 1936 岩波書店p.81.
- 8) 鬢櫛久美子、種市淳子「保育の中の紙芝居—『紙芝居、ネット』の構築とその役割—」『名古屋柳城短期大学研究紀要』No.30 2008 pp.91-99.

The Effect of Making “Kamishibai”

Bingushi, Kumiko*

Nozaki, Makoto*

Kojima, Chieko*

本稿では、手作り紙芝居の教育メディアとしての可能性を探ってみた。紙芝居を作る機会は、幼児期の子どもにも、保育者養成課程にある学生にも、非常に少ないことがこれまでの調査研究の分析から明らかとなった。

紙芝居を教育に活用することを進めてきた人々が、手作り紙芝居についてどのような評価をしているか文献を通して検討した。保育教材・教具が少なかった時代に、必要に迫られて手作りした副島ハマは、目の前の子どもに合わせて手作りしていたことが分かった。また、紙芝居を作ることは子どもにとっては自己表出手段となり、大人にとっては子ども理解につながることも倉橋惣三の言葉から理解できた。紙芝居の教育的効果を、作り演じる一連の行為にみるという松永健哉の考え方も理解できた。

実行委員会が実施してきた「キッズ紙芝居コンテスト」の作品と保育現場での取り組みを考察することで、文献にみられる手作り紙芝居についての教育メディアとしての効果を検証することができた。さらに、保育に手作り紙芝居を導入することで、5領域の総合的指導が可能となることや、保育者の実践力の向上になること、子どもの遊びの展開につながることを理解できた。

今後は、保育の場での手作り紙芝居の指導方法の開発、保育者養成校での紙芝居に関する教育カリキュラムの開発を課題としたい。

キーワード：手作り紙芝居，保育教材・教具，子どもと大人の関わり，自己表現，保育者養成カリキュラム